

## あかしあ考

奥村芳和（あかしあ台1丁目在住）

(1)

あかしあ台・すずかけ台・けやき台・ゆりのき台……ウッディタウンの街の名前は、三田の地に特に根ざしたものではない。全国どこのニュータウンに持っていっても通用する地名である。しかし、他で「あかしあ台」の町名にまだ出会ったことはない。

私は「あかしあ台」と言う地名に親しみをを感じる。外来種



ニセアカシア（はじかみ池公園前）

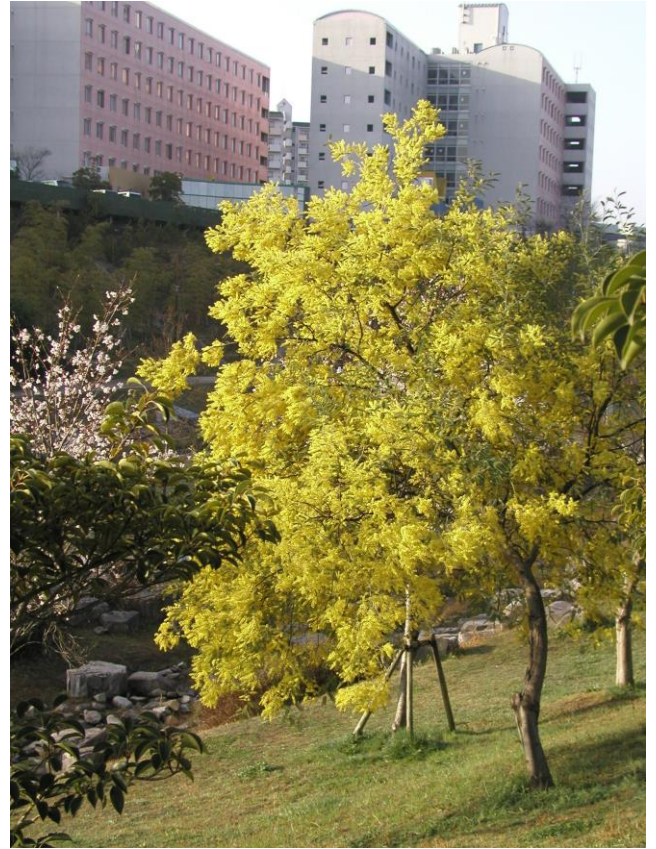
の樹木アカシアがノスタルジックなエキゾティシズムを感じさせてくれるからだろうか。

明治初期に街路樹として北米から輸入されたアカシアは、異国情緒の象徴的な樹木として、多くの詩人・歌人・小説家たちがこの樹木をテーマに作品を残している。しかし、このアカシアは多くの場合、ニセアカシアのことで本物の？アカシアは、ネムノキに似た葉をしている異種の樹木である。



蜜源植物ニセアカシアの花

「あかしあ台」には、ニセアカシアもアカシアも街路樹として植えられている。リング道路沿い歩道の車道側に、約1.6kmにわたって並木として植えられているのがニセアカシア。リング道路内側歩道の中央植樹帯のバス停付近や横断歩道付近に一本づ



ミモザアカシアの花（ゆりのき台平谷川緑地）

つ「これもアカシアですよ」と控えめに自己主張するかのようになっているのがアカシアである。

ニセアカシアは、マメ科ニセアカシア属、北米原産の落葉



満開のミモザアカシア（平谷川緑地）

高木で、欧米では街路樹として広く植えられている。花は、5～6月に白色房状に垂れ下がり、芳香があり蜜源植物になっている。別名ハリエンジュとも言われて枝に刺がある。わが国では、北海道の諸都市を中心に街路樹として多用されている。

アカシアは、やはりマメ科アカシア属、オーストラリアやアフリカの熱帯の乾燥地、サバンナの草原に自生している樹木である。フランスでは、ミモザとも呼ばれている。四月初めに房状黄金色の花をつけ、街路樹としても利用される。

「あかしあ台」のニセアカシアもアカシアも共に樹勢が今一つで、開花期を迎えても寂しい花のつき方しかしないのが残念である。

(2)

この道はいつか来た道

ああ そうだよ

あかしあの花が咲いてる

北原白秋は「この道」で、あかしあの花、白い時計台、おかあさまといっしょに乗った馬車と北海道へ旅した時の思い出を詩情豊かに歌い上げた。1927年に山田耕作が作曲した代表的な日本歌曲である。

アカシアの雨に打たれて  
このまま死んでしまいたい

と切なく歌ったのは西田佐知子。団塊の世代以上の方なら良くご存知でしょう。

札幌の大通公園、中国の大連、パリのモンマルトルの丘サクレ・クール教会に登る階段に植えられたニセアカシアの街路樹。残念ならいずれの場所も花の時期に行き合わせたことはないが、多くの小説家・エッセイストたちの心をとらえている。ニセアカシアは不思議な魅力をもった花木である。

今年も五月の終わりにリング道路のニセアカシアの街路樹が満開になった。昨年に比べると花付きはかなりよくなったものの、枝もたわわに白い房を垂らしてくれた木はごく少数。また来年に請うご期待というところである(気のきいた「アカシアの花祭」でもできれば良いのだが)。

しかし、リング道路の所々に植えられているピンク色のニセアカシア(モイロハリエンジュと言い、昭和の初めに日本に入ってきたが希にしか植えられていない)は、見ごたえのある美しい淡紅色の花を枝も折れんばかりに付けてくれた。立ち止まっては花と甘い香りを楽しむあかしあ台の方々の姿を何度か目にした。しかし、残念なことにちょうど満開の夜の突風で、自らの花の重みに耐えられなかったのだろう、ほとんどのモイロハリエンジュは枝が折れ、無残な姿になってしまった。



調べてみると、ニセアカシアは明治の中頃に北アメリカから日本へ入ってきたエキゾティシズムの代表的な街路樹として全国的に普及したようだ。ところが、元来、根が浅く倒れやすく、材質は船材になる丈夫な木であるが、折れやすい・倒れやすいと言うことで台風に見舞われる西日本から街路樹としては姿を消してしまっただけで今では台風の心配のない北海道で主として利用されているようである。

しかし、本来は丈夫な樹木で野生はこの近辺でもしばしば見られる。近年は、倒れにくい品種も開発されているとのこと、あかしあ台のニセアカシアも台風には負けない品種であってほしいものだ。また、剪定を上手にして春一番の時や台風の際に木に負担がかからないようにする必要があるだろう。

(3)

陸軍の砲兵工敵ガラス工場の跡地にある私の職場には、くぬぎ、赤松の自然林、けやきの並木道など大阪の近郊にありながら、まだ多くの自然が残されている。

この敷地の一角にニセアカシアの林もあった。過去形で書かなければならないのが残念であるが、この九月(1991.9.27.)の台風19号で、2本のヒマラヤスギの大木とともにすべて倒れてしまった。高さ十数メートル、30本ほどが小さな川を挟んで無造作に生い茂り、5月の花のシーズンになると多くの人の目と嗅覚を楽しませてくれた。その木と花をモチーフにしながら作品を創作し続け、名をなした若手版画家もいる。

ニセアカシアは根が浅く倒れやすいとは聞いていたが、三十



ニセアカシア街路樹 (あかしあ台リング道路)

本の倒木の無残な姿を目前にして、当地のニセアカシアの並木道の将来を憂えずにいらなくなる。無剪定で光合成を活発にさせてやり、しっかりと根を下ろさせてやれば良いのか、また、台風シーズンの前に剪定を行い風への備えをした方が良いのか、何とかしてニセアカシアの並木を立派に成長させてやりたいと思う。

話しかけるが、ニセアカシアの花に最大の賛辞を贈り続けているのは、詩人で作家の清岡卓行。彼は大正11年、日本の植民地の中で最も美しい港町と言われた中国の大連で生まれる。敗戦後3年間、26才になるまで留まり、思いがけなく最愛の美しい妻と結婚、引き揚げ船が新婚旅行となった。その妻との出会いまでを格調高く控え目に『アカシアの大連』で歌いあげ、芥川賞をもらった。

1898年、帝政ロシアは清国から大連を租借し、自由港をもつ新しい都市「サハロフ」を建設。市長に任命された建築技術者のサハロフは、パリをモデルにした都市計画を作成、巨費を惜しみなく投じた。南ロシアから大量にニセアカシアを運び、街路樹にしたものが日本統治後も引き継がれて街づくりに彩りを添えた。

「5月下旬に入ると大連市街地のあちらこちらに植えてある並木のアカシアが白い花の房をつけた。小さく可憐な蝶の形の花が集まって、みずみずしくふっくらとした房を形づくり、緑の濃くなってきた羽状複葉のあいだから、いわば自分の重たさを羞じらうような、あるいは誇るような感じで垂れている。それらのおびただしい白い房から、爽やかで悩ましく、寂しげで甘い、あの独特の芳しい香りが、あたりにひろがって薄められ、ほのかに品のよい香りとなっている。」 講談社文芸文庫『アカシアの大連』-サハロフ幻想-の一節である。

あかしあ台自治会広報

『広報あかしあ 第3~5号』1991.1.1.発行  
(少し加筆修正し2009年撮影の写真を加えました。)